

31. 中枢神経 (CNS) 疾患に対する HBO の問題

松下賢一*¹⁾ 杉山弘行*²⁾ 永山健太郎*¹⁾
高田 博*¹⁾

〔*¹⁾都立荏原病院高気圧酸素室〕
〔*²⁾同 脳神経外科〕

【はじめに】都立荏原病院 HBO 室では、昨年230名の患者に対して1975回の HBO を施行した。そのうち CNS 障害患者は27.8%である。今回は CNS 疾患に対する HBO 施行上の問題を取り上げ、検討したので報告する。

【対象および方法】対象は平成11年4月1日～8月31日に HBO を施行した CNS 障害患者で病名はくも膜下出血後脳血管攣縮 (SAH 後 VSP)、脊髄神経障害、脳梗塞、II型減圧症、CO 中毒、頸椎症、低酸素脳症であった。HBO 上の問題点を① HBO の理解困難、②耳抜き困難、③ HBO を安全に施行する上での問題、に分けて検討した。

【結果】 CNS 障害の患者は全体で46名。その内訳は SAH 後 VSP 8名 (17.4%)、脊髄神経障害11名 (23.9%)、脳梗塞7名 (37.0%)、II型減圧症2名 (4.3%)、CO 中毒3名 (6.5%)、頸椎症2名 (4.3%)、低酸素脳症3名 (6.5%) である。そのうち上記の問題点①、②、③を発生する可能性があった患者は33名 (71.7%) である。その内訳は意識障害16名、呼吸障害2名、移動障害5名、言語障害5名、上肢麻痺6名、精神障害2名、知能障害5名、バイタル異常4名、持続点滴21名、感染症1名であった。これらの患者のうち実際に問題が発生した患者は、問題点①は5名 (意識障害及び知能障害3名、意識障害1名、精神障害1名) で治療中、不穏行動などが見られた。問題点②は5名 (意識障害及び知能障害2名、知能障害1名、呼吸障害1名、上肢麻痺1名) で入室者による介助や、鼓膜切開を施行した。問題点③は1名 (バイタル異常) で治療前の薬剤投与により対処した。

【考察】今回の結果より、意識障害及び知能障害を有する患者は問題発生の確率が高くなっている。これらは CNS 疾患特有の障害であり、HBO 施行時には特に注意が必要である。

32. 脊柱管狭窄症に対する高気圧酸素治療の効果

吉田公博 川眞真人 田村裕昭 高尾勝浩
(医療法人玄真堂川眞整形外科病院)

脊柱管狭窄症は、脊柱管が先天性ないし發育性に狭小であったり、後天性に狭小化したものである。上下肢の疼痛やしびれ、間歇性跛行、脊髄症状を主症状とし、中高年者に多く見られる。保存療法で改善することもあるが、手術療法を必要とすることも少なくなく、症状が軽減しにくいのが現状である。

今回、1994年5月より従来の保存療法に加え高気圧酸素治療の併用を試み、当院で治療を行った脊柱管狭窄症患者212例 (男性120例、女性92例、平均年齢69.2歳) に対し、その効果について検討したので報告する。